

第四十節の秘められた歴史——第八番

山

Jeff Pippenger

2026-04-05

ペテロにとっての変貌の山は、パニウムと十字架との間に位置し、また別の線において、ペテロは、キリストの公生涯の初めにおけるバプテスマと、その公生涯の終わりにおける凱旋入城の直後との間にいる。バプテスマ、山、そして凱旋入城の結末というこれら三つの道標は、天の父が三度語られたことによって示されている。ヨハネ12章における第三回は、ギリシア人たちがイエスを求めていた時である。バプテスマは9/11であり、山は、16節の日曜法に至るまでのパニウムの歴史の中にある。ペテロにとっては、パニウムがあり、次いで山があり、それから凱旋入城の結末に至るのであって、それは、キリストが二度目に栄光を受けられる直前であった。

今、わたしの魂は騒いでいる。何と言おうか。父よ、この時からわたしをお救いください、と言おうか。しかし、わたしがこの時に至ったのは、まさにこのためである。父よ、み名の栄光を現してください。すると、天から声があった、「わたしはすでにそれに栄光を現したし、さらに再び栄光を現そう」。そこで、そばに立っていてそれを聞いた群衆は、雷が鳴ったのだと言い、ほかの者たちは、御使いが彼に語ったのだと言った。イエスは答えて言われた、「この声にしたのは、わたしのためではなく、あなたがたのためである。今こそ、この世のさばきである。今こそ、この世の君は追い出される。そして、わたしは地から上げられるなら、すべての人をわたしのもとに引き寄せよう」。イエスは、ご自分がどのような死に方をすることになるかを示して、このことを言われた。ヨハネ 12:27-33。

レビ記二十三章とペンテコステの季節によって梓づけられたその線には、三つの段階から成り、その後五日が続く起点の道標があり、終点の道標もまた同一の特徴を有している。それらの道標の間にある三十日は祭司たちの期間を表し、それはラツパの祭りにおいて終わる。ラツパの祭り、キリストが復活後、弟子たちに四十日にわたって面と向かって教えられた後の昇天、そして贖罪の日は、レビ記二十三章におけるその線の終わりの三つの段階を表している。それら三つの段階の後には、ペンテコステに向かっても、また仮庵の祭りに向かっても、五日が続く。天の父が三度目に語られたのは、ちょうどギリシア人たち、すなわち日曜法においてバビロンから呼び出される者たちを表す人々が、イエスとの会見を求めていた直前であった。日曜法の直前に、イエスは十字架における旗の掲揚を明示される。地は9/11において主の栄光によって照らされ、また日曜法において再び照らされる。

パニウムであるカイサリア・ピリピは第三時であり、カイサリア・マリティマは、バビロンから出て来るようにとの召しが発せられる十字架の第九時である。十字架以前、パニウムの預言的歴史の中にある間、ペテロは山にいるが、なおも凱旋入城の終結以前にいる。パニウムは第十六節の十字架にまで続く。パニウムにいるペテロは、レビ記二十三章のラツパの祭り、昇天、そして贖罪という三段階の歴史の直前にいる。ペテロは祭司の特

別な教えを受ける三十日の期間の中にいる。

シモンはパニウムにおいてペテロとなり、凱旋入城の前に山における一步を有する。凱旋入城は十人のおとめのたとえを例証している。婚宴に入るのは五人だけであり、三重の道標とペンテコステとの間の五日間が凱旋入城の始まりである。それはラッパの祭りに始まるが、その道標は三つの道標の結合から成っている。単一の道標として、それらはナッシュビルへの攻撃をラッパの祭りと同定する。真夜中の叫びのメッセージはまさに確認されたところであり、五人の賢いおとめの行列が、十字架、すなわち日曜法の死、埋葬、そして復活へと至る過程を開始する。

ペテロは、ナッシュビルの火の玉の予言を正すとき、また、その予言の成就においてラッパの祭りが吹き鳴らされる前に、パニウムにいる。彼は預言的必然性によって、まず山に行かなければならない。なぜなら、山は勝利の入城に先立っていたからである。アブラハムが山に行く前にその名が変えられたように、ペテロの名も、彼が山に行く前、パニウムにおいて変えられた。山は、ナッシュビルの火の玉の予言が成就する前に置かれた、ペテロの試験である。その成就是第三の、そして試金石となる試験であり、そこにおいて品性は喜びとして、あるいは恥として現される。

紀元前457年の線はラフィアとパニウムの間で終わり、創世記第十七章の契約はラフィアと一致し、マタイ第十六章の契約はパニウムと一致する。パニウムから、ペテロは山へ行くが、それはアブラハムがイサクの犠牲へと赴いたのと同様である。ペテロの線の山は、アブラハムの時代の山と一致する。

アブラハムの道標は三日間から成っていた。凱旋入城においては、キリストを乗せるためのろばを連れて来るよう、二人の弟子が遣わされた。そしてアブラハムの系譜においては、その三日の旅路は、イサクの献げ物のための薪を運ぶろばと、二人の僕を選ぶことをもって始まる。ペテロの山への八日、あるいは六日の旅路は、アブラハムにとっては三日であった。パニウムにおけるペテロは、山の前におり、またエルサレムへの入城の始まりとなるろばの解き放ちの前にいるが、そこがアブラハムの三日が始まったところである。凱旋入城において、キリストはオリブ山の上で立ち止まり、エルサレムのために泣かれた。それによって、神と古代の文字どおりのイスラエルとの契約関係の終結が示された。ペテロの山は凱旋入城の前にあり、キリストの山は凱旋入城の最中にあり、アブラハムの山はその入城の結末にある。

2026年は中間選挙の年であり、その時、聖書預言における第六の王国の第二百五十年が、その栄光に満ちた支配を祝う。その祝賀は預言的中間点として、紀元前207年のアンティオコス大王と一致しており、それはラフィアとパニウムの間の中間点であって、紀元前457年からの第二百五十年の終結を示す。

これまでに開封されてきた第十一章から第二十二章に至る四つの系統について考察するにあたり、（おそらくほかにも例はあるであろうが）、今ここで『各時代の希望』におけるそれらの章を取り上げる。第十一章は「バプテスマ」であり、第二十二章は「ヨハネの投獄と死」である。ヨハネは初めにも終わりにも位置しており、そして中間の章である第十七章は「ニコデモ」である。

「ニコデモは主のもとに来て、主と議論に入ろうと考えていた。だがイエスは、真理の根本原則を明らかにされた。主はニコデモに言われた。あなたに最も必要なのは理論的知識ではなく、霊的再生である。あなたに必要なのは、好奇心を満たしてもらうことではなく、新しい心を与えられることである。天の事柄を理解しうようになる前に、あなたは上からの新しい命を受けなければならない。すべてを新たにすることの变化が起こるまでは、わたしの権威やわたしの使命についてわたしと論じても、それはあなたに何ら救いをもたらす益とはならない。」

「ニコデモは、悔い改めとバプテスマに関するバプテスマのヨハネの説教を聞いており、また彼が人々を、聖霊によってバプテスマを授けるべきお方へと指し示していたことを知っていた。彼自身、ユダヤ人の間に霊性の欠如があること、そして彼らが大いに偏狭さと世俗的野心に支配されていることを感じていた。彼は、メシアの到来に際して、より良い事態が到来することを望んでいた。しかしたましいを探るバプテスマのヨハネの使命は、彼のうちに罪の自覚を生じさせることができなかった。彼は厳格なパリサイ人であり、自分の善行を誇りとしていた。彼はその慈善と、神殿の奉仕を支えるための惜しみない献金によって広く尊敬されており、自分は神の恵みのうちに安全であると感じていた。彼は、自分の現在の状態のままでは見ることのできないほど純粋な王国があるという考えに驚かされた。」『各時代の希望』171頁。

『各時代の希望』の中間点は、ニコデモの系列の中に見いだされる。彼は、十四万四千人の封印の系統におけるアドベンチズムへの最後の召しを表している。彼は、キリストの先駆者のメッセージを聞きながらも、自らのラオデキヤの状態に気づいていなかった一つの階級を代表している。

「ニコデモとの対話において、イエスは救いの計画と御自身の世に対する使命とを明らかにされた。後のいかなる講話においても、天の御国を受け継ぐすべての者の心の内になされなければならない働きについて、これほど十分に、しかも一步一步順を追って説明されることはなかった。御自分の宣教のまさに初めに、主は真理をサンヘドリンの一員に、すなわち最も受容的な思いをもち、民のために任じられた教師に対して開示されたのである。しかし、イスラエルの指導者たちはその光を歓迎しなかった。ニコデモはその真理を心の内に秘め、三年の間、目に見える実はほとんど現れなかった。」『各時代の希望』176 頁

ヨハネの使命とキリストへの彼のバプテスマは、神を畏れる第一天使の使命を表していた。ヨハネの使命は、信仰による義認というラオディキアへの使命であり、その使命はキリストのバプテスマにおいて力を与えられた。それはちょうど、1888年におけるジョーンズとワゴナーの使命がラオディキアへの使命であったのと同様である。キリストのバプテスマと1888年は、9/11にラオディキアへの使命が到来することを予表しており、それはラフィアとパニウムの中間点で終わる。

ニコデモとは「民の勝利」を意味し、また信仰による義認は、ヨハネの使命とともに到来し、バプテスマにおいて力を与えられ、ニコデモの真夜中のキリストとの出会いによって規定された封印のメッセージである。第二十二章は、ヨハネの死が、彼の弟子たちに、掲げられてすべての人を御自身に引き寄せる旗じるしの認識を生じさせたことを描写している。バプテスマは、2020年9月11日および2020年7月18日から2023年12月31日に至る

期間の両方であった。というのも、バプテスマは死（2020年）、葬り（三日半）、そして復活（2023年12月31日）を例証するからである。次いで真夜中の出会いにおいて、民の勝利は、ラオデキヤの盲目状態からフィラデルフィヤの二〇二〇の視力へと至る、新しく生まれることとして例証される。それから、キリストのわざが、旗じるしを掲げることとして提示される。

アブラハムにとって、ヨハネの系統におけるキリストの御業は、イサクの犠牲と一致する。ペテロにとって、その系統は、海辺のカイサリア、すなわち Caesarea Maritima の第九時において終わる。そこでは、十字架がすべての人を、信仰による義認の勝利へと招くのであり、これが第三天使の使命である。第三天使の使命は、イスラムの第三の禍いの使命であり、それは、イスラムのろばとのバラムの最初の遭遇における 9/11 に到来し、次いで 2023年10月7日に文字通りの栄えある地に対する打撃の倍加があり、さらに、バラムが古代の文字通りの栄えある地と現代の霊的な栄えある地のぶどう畑の間をイスラムのろばに乗って進むとき、ナッシュヴィルにおける第二の打撃が続く。第三の打撃は、間もなく到来する日曜法の地震である。そこにおいてイサクは献げられ、そこにおいて、殉教の白い衣を与えられる大群衆の象徴であるヨハネの弟子たちは、旗印の御業を聞き、また見た。『創世記』、『マタイ』、および『各時代の希望』の中間点は、十四万四千人の印と異邦人の召しとを明示している。

キリストがニコデモに与えられた説明は、風の働きについてのものであり、その働きは目には見えない。

「ニコデモはなおも当惑していた。そこでイエスは、その意味を示すために風を用いて言われた。『風はその思うままに吹き、あなたはその音を聞くが、それがどこから来て、どこへ行くのかを知らない。御霊から生まれる者もみな、そのとおりである。』」

「風は木々の枝の間に聞こえ、葉や花をそよがせる。しかも、それは目に見えず、どこから来てどこへ行くのかを知る者は一人もいない。聖霊の心に対する働きも、それと同様である。その働きは、風の動きを説明し尽くすことができないのと同じように、説明し尽くすことはできない。人は、自らの回心の過程における正確な時や場所を語ることができず、また、その一切の事情をたどることができないかもしれない。しかし、それはその人が回心していないことの証明にはならない。風と同じく目に見えない働きによって、キリストは絶えず心に働きかけておられる。少しずつ、おそらく受ける者自身にも気づかれないままに、魂をキリストへと引き寄せる傾向をもつ感化が与えられるのである。それらは、キリストについて黙想することによって、聖書を読むことによって、あるいは生ける説教者から御言を聞くことによって受け入れられることがある。やがて、御霊がさらに直接的な訴えをもって来られるとき、魂は喜んで自らをイエスに明け渡す。多くの人はいを突然の回心と呼ぶ。しかしそれは、神の御霊による長い求愛、すなわち忍耐強く、長期にわたる過程の結果なのである。

「風そのものは目に見えないが、見え、また感じられる結果を生じさせる。同様に、魂に対する御霊の働きは、その救いの力を感じた者のあらゆる行為のうちに、自らを現す。神の御霊が心を占有されるとき、それは生活を変革する。罪深い思いは取り去られ、悪しき行いは捨て去られる。愛、謙遜、平和が、怒り、ねたみ、争いに取って代

わる。喜びが悲しみに代わり、顔貌には天の光が映し出される。重荷を取り去る御手を見る者はなく、上なる宮廷から光が降り来るのを目にする者もない。その祝福は、信仰によって魂が自らを神に明け渡すときに臨む。そのとき、人の目には見ることのできないその力が、神のかたちに似た新しい存在を創り出す。」『各時代の希望』172、173頁。

9・11において、後の雨は降り始めた。聖書預言において「東風」として表象されるイスラムは、十四万四千人への印が始まる時に、9・11において到来した。ゼカリヤの二本の金の管から流れ下る「金の油」として表されるメッセージである後の雨は、ラオデキヤのセブンスデー・アドベンチストたちを悔い改めへと召し始めた。聖霊の風は、書かれているすべてのことを教える働きを開始し、エレミヤの古い道のメッセージを用いて、盲目のラオデキヤの人々の心に語りかけた。ニコデモに示された聖霊の働きは、さらに詳しく言えば、天の御国を受け継ぐすべての者の心のうちになされるべき「一步一步の」「必要な働き」である。キリストはその過程を風の働きになぞらえられたが、その過程は、9・11に到来した「東風」の期間中に起こる。イザヤは、この同じ期間を激しい風という語によっても論じている。

あなたは、それが芽を吹き出すとき、量りをもってこれと争われる。東風の日には、その激しい風を静められる。それゆえ、これによってヤコブの不義は贖われる。そして、これがその罪を取り除くことすべての実である。彼が祭壇のすべての石を、打ち砕かれた白亜の石のようにするとき、アシェラ像も偶像も、もはや立つことはない。イザヤ 27:8, 9。

終わりの日において、すべての預言者は互いに一致しており、イザヤの「荒い風」は、十四万四千人の証印が施される間、抑えられているヨハネの争いの風である。イザヤの荒い風は、イザヤの証言において「とどめられる」東風であり、ヨハネの証言においても抑えられているものである。ヨハネの争いの風は、神の民に証印が施される間、抑えられており、イザヤの東風は、「ヤコブの咎」が「除かれる」時期として示されている。ヘブライ語の「除かれる」という語は、贖われることを意味する。ヨハネの証印はエゼキエル書第九章と同一であり、またヤコブの咎の除去と同一である。エルサレムの中を巡って、嘆き悲しみ叫ぶ者たちの額にしるしを付ける御使いは、「東」から上って来るあの御使いだ。

これらの事の後、わたしは、地の四隅に四人の御使いが立っていて、地の四方の風を押え、風が地にも、海にも、どの木にも吹きつけないようにしているのを見た。またわたしは、もうひとりの御使いが、生ける神の印を持って、日の出る方から上って来るのを見た。彼は、地と海とを損なうことを許されているその四人の御使いに向かって、大声で叫び、こう言った。「わたしたちが、わたしたちの神のしもべらの額に印を押してしまうまでは、地も、海も、木も損なってはならない。」黙示録 7:1-3

その御使いはキリストであり、彼は、ペンテコステの季節において弟子たちに四十日にわたり面と向かって教えた期間の終わりに昇天され、また、レビ記二十三章におけるラッパの祭りにおいて、三十という数によって表される祭司たちに対する三十日にわたる面と向かっての教えの終わりに昇られる。

2026年は中間選挙の年であり、そしてその選挙はすでに預言的道標として確証されている。もし民主党が2020年の選挙を盗んでいなかったなら、トランプがローマの謎を成就することはなかったであろう。ローマの謎とは、それが第八であり、しかも七つの中の一つであるということである。その謎は、トランプを獣の像の代表者として特定する。すなわち、彼は常に第八として現れ、しかも七つの中の一つなのである。ダニエル書第7章においては、小さな角が台頭するために、異教ローマの十本の角のうち三本が取り除かれる必要があった。そこでは教皇制ローマが、他の七本の角の中で第八として現れたが、それは異教ローマから出て来たのであり、ゆえに七つの中の一つであるはずであった。ダニエル書第8章では、メディア・ペルシア帝国は二本の角によって表され、次いでギリシャは一本の角であり、それが折られると四本の角を生じた。したがって、ローマが到来する以前に七本の角が存在しており、ローマの小さな角が第八なのである。ローマが常に第八として現れ、しかも七つの中の一つであるという事実については、ほかにも証人があるが、その謎の主要な参照箇所は黙示録第17章である。

ここに知恵ある思いがある。七つの頭は、女がその上に座っている七つの山である。また、七人の王がいる。五人はすでに倒れ、一人は今おり、もう一人はまだ来ていない。しかし彼が来るときには、しばらくの間とどまらなければならない。かつていて、今はいない獣、これこそ第八の者であり、しかも七人のうちの一人であって、滅びに至るのである。黙示録 17:9-11

2020年に盗まれた選挙は、選挙が預言的道標であることを明らかにした。この事実に対する第二の証人は、カーター大統領に見いだされる。レーガンは、ローマの像を形成することにより、七人のうちの者である第八のトランプへと至る大統領たちの最初であった。レーガンは、1989年の終わりの時以来の八人の大統領の系列の最初であった。1989年はダニエル書11章1節から4節において成就し、最も富める大統領の証しを提示している。レーガンに先立っていたのは、その時点までの歴史上最悪の大統領であった。カーターは、未解決のままのイスラムの危機を残して退任した。それから四十七年後、トランプは現在、民主党員カーターがレーガンに残した問題を解決しつつある。最初でありアルファであるレーガンが、終わりにおける、またオメガにおける共和党員を予表する共和党員であった。ゆえに、トランプもまた、その直前の民主党大統領が作り出したイスラムの危機を継承する必要があったのであり、その民主党大統領は預言的必然によって、その時点までの歴史上最悪の大統領でなければならなかった。もちろん、オバマはそれらすべての預言的特徴を成就し、バイデンもまたそうであった。レーガンが最後の者を予表するためには、彼はまた、第八を予表するだけでなく、第六をも予表しなければならなかった。そうするにあたり、ユダ族の獅子は、両方の事例においてトランプに先立った失敗した大統領職の進行を確保するため、選挙を支配しなければならなかった。選挙は預言的道標であり、2026年は、七人のうちの者である第八の大統領にとっての中間選挙である。

アメリカ合衆国の二百五十年の線は一七七六年に始まり、二〇二六年に頂点に達する。紀元前四五七年の二百五十年の線は紀元前二〇七年に頂点に達し、それは十一節と十五節との間、すなわちラフィアとパニウムの戦いの間に当たる。ラフィアは預言的に創世記十七章の割礼の契約と対応しており、パニウムは預言的にマタイ十六章の十四万四千人の契約と対応している。二〇二六年は紀元前二〇七年と対応しており、それは十一節と十五節との間——ラフィアとパニウムとの間、すなわちまた、神が選ばれた民と結ばれた最

初の契約と、神が選ばれた民と結ばれる最後の契約との間に当たる。

紀元前207年と2026年の中間点に終わる二百五十年の線は、紀元64年にローマの都が焼かれた時に始まった、迫害の二百五十年の線と一致している。そこから始まって、来たるべき滅亡についての七年間の警告が、一人の奇異な人物によってエルサレムの住民に宣べ伝えられた。70年に至ってエルサレムが滅ぼされた時、神の教会は散らされ、彼らは全世界に福音を広めた。エペソの教会が復活のペンテコステのメッセージを宣べ伝えていたその同じ時に、スミルナの教会によって表される迫害が始まった。というのは、預言的必然性により、この二つの教会は一定期間並行して進行することになっていたからである。パウロは預言的エペソの教会の指導者であったが、彼はその両方の歴史について書き記した。

アンテオケ、イコニオン、ルステラで私に起こった迫害、苦難について、また私がどれほどの迫害に耐えたかについてである。しかし、それらすべての中から、主は私を救い出してくださった。まことに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者は皆、迫害を受けるのである。テモテ第二 3:11, 12.

A・T・ジョーンズは、64年に始まり313年のミラノ勅令に至る二百五十年間を特定している。その期間において、神の民に対する迫害は異教ローマによって遂行されたが、スミルナの教会へのメッセージは、その時代における最も苛烈な迫害そのものを表す十日間を示している。

あなたがたの受けようとしている苦しみを何一つ恐れてはならない。見よ、悪魔はあなたがたのうちの幾人かを牢に投げ込むであろう。それは、あなたがたが試みられるためである。あなたがたは十日の間、患難を受けるであろう。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。黙示録 2:10

皇帝ディオクレティアヌスによって表されるその迫害の期間は十年間であり、303年に始まり、313年に終わった。その時、大帝コンスタンティヌスが統治しており、彼は321年の最初の日曜日法の時にも、また330年にローマを東西に分割した時にも、統治していた。313年は、ミラノにおける外交的婚姻によって預言的に画されていた。すなわち、西方の支配者であった皇帝コンスタンティヌスが、異母妹フラウィア・ユリア・コンスタンティアを、ローマ帝国の東方の部分（あるいは、まもなく東方となる部分）を支配していた皇帝リキニウスに嫁がせるよう取り計らったのである。その婚姻は、330年にコンスタンティヌスが王国を東西に分割した時、象徴的に終結した。

ネロの二百五十年の期間は、世の終わりを予表する包囲をもって始まり、また包囲をもって終わる七年間の期間をもって始まる。その期間の終わりには、明確な十年間の迫害があった。この期間はエペソの時代に始まり、次いでスミルナの歴史を包含し、そして妥協の教会であるコンスタンティヌスの教会、すなわちペルガモの教会が西暦313年に到来するに至った。

313年から330年までのその十七年間は、ラフィアとパニウムの歴史において対応関係を見いだす。そこでは、紀元前217年の戦いと紀元前200年の戦いとが十七年を隔てている。ラフィアの戦いではプトレマイオスが勝利したが、パニウムの戦いの時までには、彼は

すでに世を去っていた。しかし彼は、紀元前221年から紀元前204年まで、十七年間統治した。三つの十七によって結び合わされた三本の二百五十年の線は、313年と2026年と対応することを考慮せざるを得なくさせる。

313年は、迫害から妥協への明確な移行であり、したがって313年は、スミルナからペルガモへの変化によって予表された、ある種の預言的性質をもつ変化の象徴であった。第一の段階は、十七年後に離婚に終わる外交的結婚によって表された。第二の段階は、最初の日曜法であった。靈感は、日曜法に先立って、段階的に進行する一つの過程が存在することを私たちに告げている。その過程には、あなたに日曜日を守ることを強制し、また神の第七日安息日を守るゆえにあなたを迫害するものとして定義される日曜法に先立つ、複数の日曜法が含まれている。

「読者が、やがて到来する闘争において用いられる諸勢力を理解したいと望むなら、過去の時代にローマが同じ目的のために用いた手段の記録をたどりさえすればよい。もし、教皇派とプロテスタントが合同して、その教義を退ける者たちをいかに扱うかを知りたいのであれば、安息日とその擁護者たちに対してローマが示した精神を見るがよい。

「王の勅令、総会議、そして世俗権力によって支えられた教会規定こそ、この異教の祭日がキリスト教世界において名誉ある地位を獲得するに至った諸段階であった。日曜日遵守を強制する最初の公的措置は、コンスタンティヌスによって制定された法律であった（西暦321年）。この勅令は、町の住民に『尊き太陽の日』に休息することを求めたが、地方の住民には引き続き農業に従事することを許した。これは実質的には異教的法令であったが、コンスタンティヌスが名目上キリスト教を受け入れた後に、皇帝によって施行された。」『各時代の争闘』573、574頁。

313年のミラノ勅令は、「王の勅令」であり、その後「世俗権力によって支持された総会議および教会条例が、その段階であった」と続いた。これらは、321年の最初の日曜法へと至る漸進的な段階であった。その段階の一つが、「世俗権力によって支持された」日曜法のような「教会条例」である。1888年の時期は、ブレア上院議員によって上院に提出されたものの、ついに成立に至らなかった一連の日曜法案を示しているが、同じ歴史の中で、いくつかの州は州によって執行される日曜法を可決していた。これら二人の証人は、313年を、「行政命令のような」「王の勅令」が、やがて竜のように語る運命にある地の獣の歴史における転換を画する指標として示している。

アメリカ合衆国が竜のように語る時、それは聖書預言における第六の王国として終局を迎えるのであり、しかもそれは、第六の王国としてのその支配の初めに語ったのと同じことを語ることによってそうするのである。1798年、アメリカ合衆国は外国人治安法および治安法を制定したが、それは日曜法を予表していた。1798年の外国人治安法および治安法は、1776年の独立宣言に始まり、続いて1789年の憲法へと至る三つの段階のうちの第三のものであった。これら三つの段階は、313年、321年、330年と一致する。

1776年、1789年、1798年は、いずれも「語る」として定義される行為であった。というのは、靈感は「国家の語る」とは、その立法および司法当局の行動である」と告げているからである。313年、321年、330年はいずれも、大帝コンスタンティヌスに関連す

る道標である。古代の文字通りのイスラエルの終焉、すなわち北王国と南王国の両方の終わりは、離婚として象徴されており、それが330年によって表されている。ミラノ勅令という結婚によって十七年前に始まった婚姻における、東と西との離婚である。日曜法の時、アメリカ合衆国はその恩恵期間の杯を満たし終え、その預言的目的という点において神から離縁されるのであり、それは古代イスラエルにとって乳と蜜の流れる地によって予表されていた。靈感は、国家的背教の後には国家的破滅が続くと述べている。それは、330年によって表されるように、神が栄えの地を離縁される時に起こる。313年の結婚から、321年における一連の強化されていく日曜法の最初のものへ、そして330年の離婚へと至るのである。1776年は313年に対応し、1789年は321年に対応し、1798年は330年に対応している。

330年は、紀元前31年のアクティウムの戦い以来の360年の成就でもある。アクティウムはローマの第三の障害であり、それゆえ、現代ローマがその第二および第三の障害を征服する日曜法を予表する。330の道標において、パニウムの戦いはアクティウムの戦いに結び付く。紀元前217年のラフィアの戦いは2014年のウクライナ戦争と符合し、次いで2015年にトランプは最初の大統領選挙運動を開始し、2020年には地の獣の二つの角がともに殺され、2023年にはそれらがともによみがえった。2024年には土台の試験が始まり、2025年には第八の大統領とその教皇側の対応者との預言的同盟が、相互の就任によって画された。

これらのことについては、次の記事で引き続き扱うことにします。